聖書宣教会通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No.174
2018.9.1

巻頭言
Greeting

× 鳥居 完次
Kanji Torii
聖書宣教会 理事
(山形第一聖書バプテスト教会牧師)

Profile

1947年横浜市生まれ。大学で土木工学を専攻、横浜市役所で地下鉄建設に従事。聖書神学舎17期卒、秋田県湯沢で9年牧会、1985年から山形第一聖書バプテスト教会牧師(8年前より主任牧師を交代)。

「聖書は『愛』の書」 詩篇 16:11

聖書を読み出して50年余になりますが、あるとき、ふと気がつき(つかされ)ました。―― 確かに、神は「愛(あなたに、いのちを)」だ。聖書(神)は、これを伝えたい(届けたい)のだ。だから、金太郎飴のようにどこを開いても「愛」が出てくるのだ。 ―― その事実を共有すべく、私が担当の主日礼拝毎に、旧約聖書の創世記から順に一書ずつ取り上げ、教会の礼拝説教で語ってきました。そして、今年7月に旧約聖書が終わり、いよいよ8月から新約聖書に入ることになりました。

さて、昨年、宗教改革から500年の2017年、新改訳聖書が新しくなりました。私たちの教会では、この8月から正式に主日礼拝の聖書朗読において、『聖書新改訳2017』を使用することになりました。もちろん、私自身は既に手にしておりますが、読み比べるごとに新たな発見をさせられております。

それにしても、聖書翻訳というものはその現場の一端を知れば知るほど、なんと気が遠くなるほど地道な働きかと思い知らされます。しかし、主にあってこれほど責任ある働きはないかもしれません。神学舎時代、組織神学の聖書論の授業で、舟喜順一先生が話されていたことが思い出されます。「原語をへたにふりかざしている人よりも、訳語を丹念に丹念に読んでいる人の方が、はるかに原語的表現方法を知っている可能性がある。なぜなら、すでに日本語訳の聖書の中に十分原語的表現がなされているから‥‥」。当時、新改訳の改訂版に取り組んでおられた順一先生の実に深い意味のある言葉です。更に先生はこう語られました。「ヘブル語(ギリシャ語)であることが、なくならない。日本語であることが、なくならない。この接点で翻訳がなされたらすばらしい。常日頃、牧会者が聖書を翻訳していく段階の積み重ねから、聖書翻訳が生まれなければならない。だから、聖書翻訳は教会の仕事。特定の人だけがしていては、チェックすることができない。牧会の中で、自分の持っている一番良いものを伝えるべきだ。」

牧会生活42年になりますが、順一先生が語ろうとしておられた意味の深さと同時に、その責任の大きさに圧倒されています。聖書宣教会の働きは、その責任の一端を担うべき器を育てるための、重要な働きをしているのだと思います。その働きがますます祝福されるように祈らされます。しかし、それとともに何よりも私自身が牧会の現場で、最後までその「愛」の書を正しく伝える責任があることを、恐れつつ受け止めていきたいと思います。

No.174 Topics

- p03 学びの窓
- p04、05 キャラバン伝道報告
- p06 夏期研修講座の報告
- p07 教会音楽夏期講習会に参加して

主の恵みを待ち望む

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

大阪北部地震に、西日本豪雨に、大きな困難に直面された皆様に主の慰めが豊かに届きますようにお祈りいたします。酷暑の夏でもありました。個人的にも教会としても、予期せぬ苦難の中にある方々もおありでしょう。恵みの主に対する信頼を堅くして、一歩ずつ踏み出させていただけますように。

夏の感謝

夏の大切な働きの一つは夏期研修講座です。祈りの聖書的な理解を求めて、各地から集まってくださった方々と学び、交わる幸いな講座でした。講義録の出版準備のためにお祈りください。教会音楽夏期講習会も盛会の幸いな学びの機会でした。秋のミニ講習会（9/29, 京都）もご活用ください。キャラバン伝道も、同じく、主の守りの中で行なわれました。受け入れてくださった諸教会の皆様に感謝を申し上げ、また多くの皆様のお祈りに感謝を申し上げます。それぞれ、続く誌面を通して垣間見てくださり、主への感謝を共有していただければ幸いです。

研修生一同は、奉仕教会、母教会や各地で夏の期間ならではの訓練にあずかり、充実したときを過ごしたはずです。教職員も夏の奉仕や調整の期間をいただきました。9月から再開する前期の学びは、10月12日まで続きます。

秋の動き

秋には1泊2日のリトリートが行われます。今回は北米の“福音派”と政治の関係について考える機会を持ちます。10月からはオルガン演奏会、オープン・デイに賛美礼拝と諸行事が続きます。どうぞ羽村にお出かけください。

皆様も忙しくなさる時季でしょう。収穫の主に期待して働きたいと思います。また、それだからこそ主の前に静まることを大切にしたいと思います。学舎では、日々の祈りと静まりに加えて「祈りの日」を設けています。前期には遠藤芳子先生から大変幸いな励ましを受けました。後期は11月22日に岩井清先生が奉仕してくださいます。楽しみにしています。

日本宣教を想う

6月に日本宣教協力会の日韓教役者・リーダー研修会で奉仕させていただきました。日本宣教に情熱を燃やす大勢の伝道者がたと出会い、交わり、「渾沌としている世界における教会の使命」を考える幸いな機会でした。少数者ではあれ、教会がみことばに従って今を生きることが、この国、この世界の次の時代の有り様に決定的な影響を与える。そう語りながら、自らがチャレンジを受けて帰ってきました。

学舎の研修生一同が、みことばに従って生きる歩みを堅くすることができるように、どうぞ続けてお祈りください。また、そのために主が学舎を整えて用いてくださいますように、と。

神である主の霊がわたしの上にある。
貧しい人に良い知らせを伝えるため、
心の傷ついた者を癒やすため、
主はわたしに油を注ぎ、
わたしを遣わされた。
捕らわれ人には解放を、
囚人には釈放を告げ、
主の恵みの年、
われらの神の復讐の日を告げ、
すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。
（イザヤ 61:1,2）

File No.007

ジョン・H・ウォルトン『創世記１章の再発見』（いのちのことば社、2018）

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

本書は、科学と聖書を調和させる一致論者や創造科学に反論する目的で書かれているが、その論述には少なからずの問題点がある。

- ウォルトンは、創造を物質的起源と機能的起源に区別するだけでなく、物質と機能を分離し、1章が物質的起源を扱っていないとする。これは「間違った二分法」で、両者を分離すること自体が現代的手法である。「古代の世界観で聖書を読む」ために科学的世界観との違いを過度に強調し、聖書を古代オリエント文化の流れに「埋め込む」という著者の手法は、聖書の独自性を軽視することになっている。

- ヘブル語のバーラーが「創造する」ではなく「機能を与える」を意味するという著者の主張は、ワードスタディーの誤用に基づく。著者は、バーラーの目的語を分類するだけで、アーサーやヤーツァルのような類義語との関係（ワードペア）や、「(家を)建てる」や「（湯を）沸かす」のような、結果目的語を取る動詞の可能性を全く考慮していない。

- 神が被造物を「造る」という行為は、バーラー（27節「人を・・・創造された」）やアーサー（26節「人を・・・造ろう」）の他に、ハーヤー「存在する」（3節「光、あれ」）によっても述べられている。著者が、「神のことばによる創造」という聖書独自の事柄を扱っていないことは、創造を論じるに際して致命的欠陥である。6節では「大空」（ラキーア）という「もの」が造られた後に、「水と水の間を分ける」という機能が与えられた。

- ウォルトンは、物質素材の創造が「創世記1章の7日間に先立つ」ものとし、「前機能的宇宙の一部」としての生き物の存在を認める（197頁）が、そのような考えは、彼が求めている聖書の「字義的な」読みからは出て来ない。2節を、機能がまだ与えられていない「未秩序」の状況または「非存在」を示すと考えるが、これは「混沌から秩序」へという混沌説（グンケル、バルト）を、表現を変えて主張しているわけで、結果として「無からの創造」の教理を否定することになっている。

- 1章が「神殿神学」に基づいているというウォルトンの仮説は、1章が祭司的視点から記されているという、文書資料説のPの立場から創世記全体を見直すという「新しい」文書資料説に立つのでない限り出てこない発想である。そもそもイスラエルにおける神殿の役割は、異教におけるように、神が「住み、安息する」場所ではなく、「神のかたち」として造られた人間が創造神を「礼拝する」場所として建てられた。創世記1章に「神殿神学」を認めることは、古代オリエントにおける「小宇宙」としての神殿の概念を、創世記1章と2章に読み込むことになる。ある学者は「神殿は地上における神の住処ではあるが、創世記1－11の記事に、神がこの世界をその住まいとして造ったという所はない」と反論する。神殿が、時に、宇宙を象徴するような側面を持つからと言って、宇宙を神殿になぞらえて創造したと、1章が主張しているかのようにウォルトンが考えるのは誤りである。

03 キャラバン伝道報告
Caravan Reports

遣わされていく教会の兄弟姉妹と救いの喜びを分かち合いたい。その喜びが本当に良いものだからこそ、ともに宣べ伝えたい。その願いとともに祈り備えてきました。そしてこの夏、それぞれのチームが神様から祈りの応答と豊かな恵みをいただきました。すべてを守り導いてくださった神様に感謝します。

吉田 真太郎
Shintaro Yoshida
2018年度 キャラバン実行委員長

④ 日本長老教会 辰口（たつのくち）キリスト教会（石川県）

7月16日(月)–24日(火)　重田岳史、大橋歩、高石啓明

移動日2日を含む9日間の日程で、トラクト配布、祈祷会での奨励、親子集会での子ども向けメッセージやお楽しみ企画、そして主日礼拝での説教奉仕をさせていただきました。

トラクト配布では、教会近隣の住宅地に配り終えるという目標を達成できました。祈祷会には未信者の方も来られ、キリスト教信仰に対する思いをお聴きし、共に祈ることができました。子ども達ともたくさん遊び、その間に持たれた牧師夫人とお母さん達の交わりも祝されました。礼拝には海外からの留学生が出席しており、説教奉仕で英語の同時通訳を行いました。

毎朝、加藤牧師とチームで祈り会を持ち、お互いの証や先生の宣教ビジョンを共有することができました。先生がチームの一致を絶えず励ましてくださり、それぞれ喜びをもって奉仕することができました。主の恵みを感謝します。

⑤ 日本福音自由協議会 祝園（ほうその）チャペル（京都府）

7月23日(月)–30日(月)　吉田真太郎、金在賢、吉田知基

「とても明るい教会らしい」という前評判を耳にしており、どんな雰囲気なのかと期待と緊張を抱きながら祝園チャペルへ向かいました。実際の祝園チャペルは私たちの想像以上に、キリストにある喜びに溢れた教会でした。

私たちは主に、トラクトの配布、祈り会での証し、教会キャンプ、礼拝での説教と特別賛美のご奉仕をさせていただきました。そのひとつひとつで神様の御業を見せていただくことができました。

祝園チャペルは子どもミニストリーに重荷があり、そのキャンプでは、参加した子どもたちがみことばに応答し、それぞれ決心したことをみんなの前で語りました。その場に立ち会うことができたことは大きな恵みでした。

教会に仕えるために遣わされたはずだったのですが、かえって教会から多くの愛と励ましをいただいたキャラバン伝道となりました。

❶ 日本福音キリスト教会連合 恵庭（えにわ）福音キリスト教会（北海道）

7月24日（火）–30日（月）　國分力、長澤和裕、吉村直人

今回のキャラバンでは、恵庭福音キリスト教会を開拓した千歳福音キリスト教会にも関わらせていただきました。

恵庭福音キリスト教会では、祈り会での奨励、証、トラクト配布、会堂の外壁の補修作業、主日の説教奉仕を、また千歳福音キリスト教会では、主に子供集会の奉仕をさせていただきました。

子供集会は地域のお祭りと日程が重なっていたこともあり、最初はあまり子供達が集まりませんでした。それでも祈りつつ集会を続けていると、段々と地域の子供達が集まってきて、彼らにみことばを伝えることができました。何人かの子供達は翌日の日曜日にも教会に来てくれました。主が確かに私達と共にいて、働いてくださっていることを実感しました。

また交わりの中で、私たちが普段住む場所からは離れている北海道の地にも、同じ主を信じる兄弟姉妹がいて、同じ信仰を持っているということを感じ、励まされた一週間でした。

❷ 日本福音自由教会協議会 川口福音自由教会（埼玉県）

7月19日（木）–25日（水）　丸毛雄、杉本信、谷口真樹

川口福音自由教会は地域宣教に力を入れていて、英会話教室に多くの人が参加していました。宣教師の先生が教え、教会員が丁寧におもてなしをしていました。子どもたちがリラックスして英会話を楽しんだ後、ショートメッセージをさせていただきました。真剣に話を聞く子どもの姿に、主のご臨在と教会の忠実な働きが背後にあることを実感しました。英会話の子ども向けイベントでは、1階ホールを黒シートで覆い、教会の皆様と一緒に宇宙を作りました。もちろん、子どもたちも大喜び！

主日礼拝では川口教会の皆様と共に父なる神をほめたたえる幸いに与れました。このような礼拝・教会に周囲の方々が導かれるように祈りを新たにさせられました。地域にみことばの種まきをする大切な働きを改めて教えていただき、その一部をご一緒させていただいた幸いな7日間でした。

❸ 日本福音自由協議会 長野篠ノ井福音自由教会（長野県）

6月29日（金）–7月6日（金）　木下奈津子、岡村建、小山稔

開拓が始められて2年3か月の教会で、地方での開拓に対する姿勢、地域の一人ひとりと信頼関係を築いていく大切さを学びました。

私たちの奉仕は主に、大学生向けのバーベキュー集会、伝道礼拝での説教・証・特別賛美、高校前でのトラクト配布、戸別のトラクト配布、求道者クラスでの証でした。土曜日と日曜日は、韓国の宣教団体イエス・ヴィジョンから送られている留学生宣教師4名と共に奉仕させて頂き、良い交わりの時でした。バーベキュー集会には新しい大学生も与えられ、教会につながるように皆で祈りました。

鈴木義明先生は41年間、牧会して来られ、現在、開拓の働きをしておられます。これまでのお証も伺い、主のみことばに信頼すること、召命の大切さを教えて頂きました。

多くの恵みと、深い交わりのキャラバンでした。感謝です。

祈り

鞭木 由行
Yoshiyuki Muchiki
2018年度夏期研修講座コーディネーター

今夏の夏期研修講座は、7月9日から11日まで奥多摩福音の家で持たれました。定数を少し超えた86名が集い、良い研修の機会となりました。今年のテーマは「祈りの聖書的理解を求めて」となるはずでしたが、発表された講義にかなりのばらつきがあり、このシリーズとは一線を画することになりました。

研修会初日は、開会礼拝に続いて三つの講義がありました。伊藤暢人先生は「呪いの詩篇」に取り組み、特に詩篇83篇の釈義レポートを提示し、このような詩篇を私たちがどう理解し、牧会の中でどう用いることができるかを検討しました。結局最後までこれが一番論じ合われたテーマとなりました。

続いて今回初めて講師として加わってくださった田村将先生は、イザヤ書19章3節に現れる死者儀礼に注目し、「死者への祈り」という問題を提起しました。これは全く異教世界の問題でありながら、実は私たちクリスチャンにとっても身近な問題であることに気づかせてくれました。

初日の夜は、津村俊夫先生が第二サムエル記7章18節から29節に記録されている「ダビデの祈り」を取り上げました。散文で書かれていますがそれを詩文的に理解することで見えてくるダビデの祈りの特徴を示して、祈りのあるべき姿を提示してくださいました。

二日目は、三浦譲先生による「ルカの福音書における祈り」でした。ルカの福音書全体に見られる祈りへの言及を掘り下げ、主イエスの祈りの姿を浮かび上がらせると同時に、初代教会の祈りの姿を提示してくださいました。ルカ文書全体において、祈りについて鍵となる言葉が「いつも祈る」ことであり、またいつも祈るとは、みこころにかなっていない現実に対する戦いであると教えられました。

その後、内田和彦先生が、「主の祈り」について講解されました。特に新改訳三版と大きく変わった箇所について内田先生から丁寧な説明を聞けたことは参加者にとって大きな助けとなったことでしょう。その後、2つの箇所の解釈について議論されました。一つは「赦しました」(アオリスト)を「赦します」とした点、もう一つは「ように(hōs)」を実例を導入する用法と理解し、訳出しなかった点でした。今後も議論が必要でしょう。

午後の時間、自由参加で聖書翻訳の説明会と、また午後5時から質疑応答を中心としてディスカッションが行われました。そして、夜、赤坂泉先生による「牧会者の祈り」の講演がなされました。日本ではいわゆる「牧会祈祷」と呼ばれることの多い祈祷形式を歴史的にたどり、最後は第一テモテ2章におけるパウロの祈りの勧めを取り上げ、牧会者が祈るに当たりいくつかの具体的提案をしてくださいました。

三日目は、私による「礼拝における祈り」です。イザヤ書56章から「教会は祈りの家」であることを語り、それが新約で、またその後の歴史においていかに成就しているかを考察し、今日の教会においてそれが如何に可能であるかを考えました。最後は総括で、全体をもう一度議論し合いながら復習した次第です。

氏家 美智代
札幌希望の丘教会

今年も昨年の初参加に続き、教会音楽夏期講習会を受講させて頂けましたことを心から感謝いたします。

礼拝に携わる奏楽奉仕者として、たくさん大切なことを教えて頂き、新しい気づきと再確認の3日間でした。オルガン奏法は基本から丁寧に教えて下さり、楽譜に込められた聖書のことばが音楽として表され福音となることを熱心に教えてくださる先生方に感動致しました。参加された兄弟姉妹とおいしいお食事とともに、楽しいお交わりでは良い刺激をたくさん頂きました。主をほめたたえる全員での合唱も主への感謝で満ち溢れました。神学生のお証しと、生き生きご奉仕される姿からも励まされました。「わがたましいよ　主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」今回の中心テーマ詩篇103篇のみことばを内に住まわせつつ、学んだ多くを適用して賛美とご奉仕ができるよう歩ませて頂きたいと思います。励ましと感動の学びをありがとうございます。

岡田 淑子
佐倉福音キリスト教会

今回、私は初めて教会音楽夏期講習会に参加させて頂きました。普段は所属教会で奏楽と聖歌隊のご奉仕をさせてもらっています。私自身は若かりし頃に音大の声楽専攻を卒業しておりますが、今は主婦業に、又パート仕事にと追われる日々で、練習時間も充分にとることも出来ないのが現状です。

そんな中、今回の講習会に参加する機会を持つことが出来ました。みことばを丁寧に一節ずつ読み解き、教理的な事についても学ぶ時を持ち、他教会の方々と講義や分科会を共に受ける中で、同じ主にあって奉仕者として立てられた兄弟姉妹の、それぞれの場での活動や個性また信仰を見ることが出来、主の御業を思わされました。

講習会期間中に毎回、美味しいお食事を作っていただいた食堂の皆様、また、朝から晩（本当に！）まで私達につきっきりで学びのサポートをして下さった先生方に感謝申し上げますと共に、そのご準備とご労の上に主の豊かな顧みがあります様にお祈りいたします。

小久保 えみ子
夙川聖書教会

「みことばをうたう」ということは、まずしっかりと「みことばに聞く」ことが大切であることを思わされました。何度も何度も朗読し、黙想し、味わい、原典からも学び、前後も含めて何が語られているのかを深く理解し、みことばに忠実に、リズム、音、メロディーを求めていくという過程を、限られた時間ではあったものの体験することができ感謝です。安易にメロディーにのせてしまうと、生きて働くみことばが押しやられてしまうことも思わされ、「作曲は捨てていく作業」「みことばに音楽が仕える」ということがよくわかりました。それはまた、自分を捨てていく、自分自身がみことばに仕えることであることも示されました。

間、拍子、音の高低、調、♯や♭の意味合いなど、具体的なことも学べて様々な発見がありました。わかりやすく教えてくださった先生のお働きに感謝し、主の御名を賛美します。

与えられた恵みと学びを覚えて、みことばに仕えていきたいです。

聖書宣教会通信 No.174　発行者：岸本 紘　〒205-0017 東京都羽村市羽西 2-9-3　Tel 042-554-1710 Fax 042-554-5562　http://www.bibleseminary.jp/　振替 00150-6-34971（聖書宣教会）

図書館から ー リサーチ・ライブラリを目指して（2）ー

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

当時は、大学の講座としての「図書館学」は慶応大学にしかありませんでした。舟喜順一先生が、図書館学の専門教育を受けたO姉と、神学教育の全体像を見据えながら、日本の神学教育に適した図書館システムを構築するのに貢献されました。ユニオン神学大学図書館システムは、米国の神学教育のために考案されたものですから、必ずしも日本の神学教育に合っていないところがありました。宣教学や実践神学の分野の書籍、とりわけ日本人著者の本や日本の教会にかかわる分野の本の分類は、現実に合ったものに改訂し続ける必要がありました。洋書が半数以上を占める図書館のためには、このシステムは最善のものであったと思います。一般の図書館と違い、洋書と和書が同じ検索システムで検索出来るのも宣教会の図書館の特徴になっています。

私は宣教会で教え始めた翌年から、大学で言語学を教えることになり、それによって生活が支えられ、時間の半分を聖書神学舎での授業と図書館の働きのために用いることが出来るようになりました。しかし、当時の図書予算は、年間、二十万円程でした。

私個人は、15年間、国立大学の教官でもありましたから、それなりの研究費があてがわれました。文部省の科学研究費を数年に一回は受けていましたので、毎年、宣教会の年間図書費の5倍ほどの額を一人で使うことが出来ました。宣教会の図書予算の額を見る度に、こんな額で何が出来るの？度々、「主よ！」と天を仰ぐ思いでした。（続く）

聖書宣教会からのお知らせ
Information

「オープンデイ」のお知らせ
11月10日（土）

オープンデイは、授業や礼拝にどなたでも出席いただける「公開授業」の日です。申込は不要です。見学などの機会として是非お用いください。皆様のおいでを心よりお待ちしています。
（内容については、当日変更となる場合もあります。）

	I ～ II 8:20～9:55	10:00～ 10:30	III ～ IV 10:40～12:15	12:15 ～
1年	ヘブル語（I限） （伊藤 暢人）	チャペル （三浦 譲）	組織神学II （神論） （鞭木 由行）	簡単な昼食の提供があります（無料）
2年	旧約通論（II限） （田村 将） 旧約研究I （五書） （津村 俊夫）		弁証論I （野村 天路）	
3年	宣教学II （異教・異端） （赤坂 泉）		組織神学VII （終末論） （横山 昌英）	
4年	新約研究II （使徒の働き） （三浦 譲）		教会音楽特別講座 （学年によらず）	

「賛美礼拝」のお知らせ
12月1日（土）14：30

「主のみことばを待ち望む」

聖書：詩篇 130篇 5節
説教：津村 俊夫（聖書宣教会 研究図書主任・図書館長）
曲目：
・深い淵から 主よ 私はあなたを呼び求めます。詩篇130篇
　Aus der Tiefe ruf ich, Herr, zu dir　Der 130. Psalm（Heinrich Schütz swv25）
・御神よ 我は 深き淵より（川中子義勝 岳藤豪希）他